京都新聞 2010 年（平成 22 年）1 月 31 日

医療連携へネットワーク作り

患者さんの多くが、日ごろは近所の開業医の先生とかかわっています。開業医の先生は、長期間に渡り患者さんと、その家族を診察しています。患者さんの生活環境、体質、病歴を最もよく知る「かかりつけ医」です。この先生が病院での診療が必要と判断された時、紹介状を書き病院に連絡します。南丹病院の地域医療連携係は、紹介先の専門医の外来に早速予約し、来院された患者さんの窓口での便宜を図ります。今日も外来では、予約された紹介患者さんに、紹介内容を参考に診察検査を進め、必要なら入院治療を行います。

わたしどもの病院は、10年以上前から、かかりつけ医の先生方と相談し、開放型病院となりました。開放型病院と病院の担当医が協力して入院診療に当たり、出来る限り早く、かかりつけ医の先生のところに帰って頂くシステムです。また地域の病院とも連携し、病院と南丹病院との相互の入院や転院も、地域医療連携係を通じて行っています。このように地域の医療機関や福祉施設などとの連絡調整を行うなど、患者さんと南丹病院を結ぶ「なんでも係」です。

わたしたちの地域は、医師数、病院数、開業医数は、都市部と比較すると、必ずしも十分とはいえません。そのため地域の医療、福祉機関などが、その機能に応じて役割を分担して医療を行う事が重要です。

この地域の医療機関と南丹保健所が協力して、医療連携のためのネットワーク作りに努力しています。詳しくは病院のホームページをご覧ください。http://www.nantanhosp.or.jp/